

『ちくま評論選』解説

20 多言語主義とは何か 川田順造

■凡例

- 1 ①②…は形式段落番号。◆は、設問。 2 ▽は、本文の追跡・分析  
3 ▼は、読解に関する技法。 4 ☆は、記述に関する技法。

■追跡

① ●言語というものについて、根源のところから考えるのに、アフリカは貴重な場を提供してくれる。私が行きはじめた頃、つまり一九六〇年代のはじめで、英、仏の旧植民地から政治的独立を達成したばかりの時代には、私が最も長く暮らしたブルキナファソ(当時のオートボルタ)では、政府発表の公式数字でも、学齢期の児童の就学率は九パーセントだった。学校では小学校から、旧植民地宗主国がのこした公用語のフランス語だけを教え、フランス語だけを使って他の教科の教育をするのだが、もともとこの土地の人たちは文字というものを使わなかったから、当時電気も水道もない大部分の土地で、住民は大人も子どもも、あらゆる種類の文字と一切関係のない生活をしてきた。就学率やフランス語の識字率は、その後いくらか上がったようだが、いまでも首都のワガドゥグーや、西の商業都市ボボ・ディウラソなどの大都会を少し離れば、人々は文字とは無縁に暮らしている。いや首都のなかでも、市場で、野菜や香辛料の店を出しているおばさんたちは、買い物ともども、◆1文字など必要としない言語活動の次元で活発に商取引をやっている。

▽「言語とは何かを根源から考える」、どうもこれがここでの主題のようだ。こういうところはチェック。

さて、文化人類学者らしく、例に挙がっているのは、アフリカ・ブルキナファソ。(文化人類学については『現キー』参照。)「ポスト・コロニアル」という用語知ってるかな? 植民地主義の後遺症が残っているという問題を考えるときに使われる。ここにあるのも「ボス・コロ」の状況の一例。ただ、ここで示されているのは、旧宗主国(植民地時代の支配国)がもたらした(資本主義経済(お金の要る生活)や(学校教育(文字の要る生活))に、完全には「毒されていない」人々のありようである。「文字なし」でも、いきいき暮らしている人々の実例。これは何を意味するのか?

◆問1「文字など必要としない言語活動の次元」とはどのような場面か。

具体例として挙がっているのは、店を出している「おばさん」の言語活動、また、買い手の言語活動。これは私たちの買い物の場面を思い浮かべても同じようなものだろう。ただ、コンビニやスーパーでは、包装や掲示の文字を見て、商品の内容や価格を判断するようになってきている点で、文字が入り込んではいない。しかし、昔の市場なら、

声で「コロケ四つ、ください」「はいよ、二百円です」てなもんだった。文字は不要。アフリカでも同じだろう。「おはよう、元氣?」「ああ、おはよう、元氣さ。」「お風呂が沸いたよ、入りなさい」。『もう寝るわ』……。日常生活ではコミュニケーションに文字を必要としない場面が多く見られる。

「どのような場面か」という問いかけには、どう答えるのがいいか。設問のタイプとしては、☆「抽象↓具体化」の問いだ。

「言語活動」が行われる場面は、場所の名前で言うなら、「学校」「市役所」「マスコミ」「会社」「郵便局」「インターネット」…といろいろあるけれど、これらは、文字の必要度が高そうな場面である。そうでない場面、「家庭」「市場」「近所の人とのあいさつ」…は、文字の必要度が低い場面である。そういう場面のことを指していることがわかるように書かれていればオッケイだ。

「解答例」「文字がなくてもコミュニケーションがとれる、ものの売り買いや家庭などの日常的な場面。」

② ●雨が一滴も降らない長い乾季の農閑期の夜、あちこちの家の中庭の、満天の星の下で、夜ふけまでつづく夜のまどい「ソアスガ」で語られるお話の数々を聞いて、私はこの人たちの◆2声としての言語の輝きにうたれた。それらのお話を録音したものを、いろいろな機会にうたわれる歌や、私がその後も現在まで研究しつつつけている、歴史を語る「太鼓ことば」などと一緒に、録音、編集して解説をつけたレコードアルバム(その後カセットブック)として公にしたとき、それを聞いた何人もの友人が「声がきれいだね。」と賛嘆をこめていつてくれたのを思い出す。話したり歌ったりすることのプロでも何でもない、昼間は泥まみれになってかせいでいる、栄養不良も多いかきや娘やおばさんたちの、いったいどこからこんな素晴らしい声か、ことばが出てくるのか、私もむしろいぶかしさを抱いたくらいだ。

▽▼筆者の立場を、読み取る。筆者は何を(よい)と考えているのか、何を否定しているのか、このことにはいつも注意してはならない。読み手の常識だけで判断してはいけない! (よい)意味を表すことばが使われているか、否定的な意味を表すことばが使われているか、ということに敏感になる必要がある。

私たちは、文字をたくさん知っている方が(よい)とされる社会に生きているが、筆者のここでの認識は、それとは逆である。「声としての言語の輝き」とか「こんな素晴らしい声」という表現は、もちろん肯定的なものである。つまり、筆者は、文字ではない、生の声のすばらしさを示そうとしている。声▽文字、という関係を確認しておくこと。

脚注問題2は、③段落を読んでから。

③ ●文字を用いた学校の言語教育で画一化され規格化されることのなかった、アナキーなことばの輝き——私はこのサバンナに生きる人たちの音声言語の美しさを、よくこういうことばで表現する。この人たちは学校で、文法書を使って「言語」を教

わらなかつた。文法とも辞書とも無縁に生きてきたので、この人たちにはいわゆる方言だけでなく、村語があり、家語が、自分語がある。ひとりひとりが◆3自分で身につけたことばを、自分の発音で、それも吹きさらしのサバンナの屋外生活の多い毎日のなかで、よく通る大きな声で話すことを、幼いときからくりかえして育ってきたのだ。声が、ことばが輝いているのは当然だともいえる。

▽問2の答えの材料がここにある。「アナキー anarchy」 ①政府が機能しないで、社会秩序が混乱している状態。無政府状態、② 社会の秩序や権威から自由なさま。ここは、②。

◆問2 「声としての言語の輝き」とはどのようなものか。  
これも、☆「抽象↓具体化」の問い。

と問われても、私たちは聞いていないのだから、説明のしようがない。…もちろん、書かれていることから答えるのである。やるべき〈作業〉は？ そう、〈輝き〉ということばのチェック。ことばの〈輝き〉はどのように形容されているか。

・ 具体的には「美しい・素晴らしい声」。(②)  
・ 文字を用いた学校の言語教育で画一化され規格化されることがなかつたために生まれたことばの輝き。(③)

・ ひとりひとりが自分で身につけたことばを、自分の発音で、それも吹きさらしのサバンナの屋外生活の多い毎日のなかで、よく通る大きな声で話すことを、幼いときからくりかえしてきたために生まれたことばの輝き。(③)

「〜声のすばらしさ(または、美しさ)。」を文末にしてはどうだろう。「〜」のところには、それがどのようにして生まれてきたかをまとめたものを当てはめる。

「解答例1」「文字を用いた学校の言語教育で画一化され規格化されることがなく、ひとりひとりが自分で身につけたことばを、自分の発音で、それも吹きさらしのサバンナの屋外生活の多い毎日のなかで、よく通る大きな声で話すことを、幼いときからくりかえしてきたために生まれた声の素晴らしさ。」

長いね。一三〇字だ。せめて半分、七〇字にしてみたい。  
「解答例2」「学校教育で画一化されたものではなく、各自で身につけたことばを大きな声で話すことを、幼いときからくりかえしてきたために生まれた声の素晴らしさ。」

◆問3 「自分で身につけたことば」とはどのようなものか。  
問2と重なっている。問2で使った「文字を用いた学校の言語教育で画一化され規格化される」とか「学校で、文法書を使って言語を教わる」といったことは、「自分で身につける」ことの反対のことである。☆端的に答えるなら、「学校で教わるのではなく、自分で身につけたことば」ということになるだろう。

しかし、ここでは、「自分で身につけたことば」の部分が生(ナ)のままである。ほんとうに自分ひとりではことばは身につかないのだから、学校ではない、どんな場で習得

したのか、を「自分で」の代わりに挿入したい。  
それはどんな場か。問1がヒントになるだろう。「日常生活における身近な人々とのコミュニケーションの場」ぐらいでどうだろう。

☆〈端的に答えてみる〉↓〈修飾・形容・いいかえ・補足を考える〉  
「解答例」「文字を用いた学校での言語教育で身につけたものではなく、現実の日常生活で身近な人々とのコミュニケーションを繰り返す中で習得したことば。」

④ ●さらに、私はこれもこのサバンナの人たちの言語生活とつきあって教えられたのだが、文字を使わない社会にあって、しかも電気の拡声装置を一切もたない生活で、上手に、よく通る声で話すということの価値がいかに大きいか。とくに文字偏重で、話すことの訓練がおろそかにされている私たち日本人の社会では、あまり話すことがうまい人はむしろ煙たがられたり、警戒されたりする。あの人は口べただが、文章を書かせると実にしっかりしているなどという人の方が、むしろ奥ゆかしいと思われたりする。だが、「読1」文字を用いない社会で、上手に話すということの価値は絶対だ。そういう価値観が支配する社会で、夜のまどいで大きい声で上手にお話をして皆をおもしろがらせることを、子どもときからやっていたとすれば、しかも学校の授業で、文字を使って、「国語」としての標準語を教えこまされなかつたとすれば、この人たちのことばが、アナキーな輝きにみちているのはむしろ当然だともいえるのだ。

▽「まどい(円居)」 ①親しい人たちが集まり、語り合ったりして楽しい時間を過ごすこと。

■読解問題1 「文字を用いない社会で、上手に話すということの価値は絶対だ」とはどのようなことか、説明しなさい。百六十字以内。

いつも、なぜ型の問いは、どのように型に変換して考えよ、といっているが、この設問は、ある意味で、その逆をやれば答え方の見当がつくという問い。つまり、「文字を用いない社会で、上手に話すということの価値が絶対」なのは〈なぜ〉か、と問うてみるのである。

それは、文字に重きを置く日本のような文字社会では、上手に話すことの価値が低いことの裏返しである。なぜ、日本では「文字 > 話す」なのか。本文に沿った答えはこうだ。1「文字が通用しているから」、2「電気の拡声装置があるから」。では、〈サバンナ〉の社会ではなぜ「文字 < 話す」なのか。1「文字が通用していないから」、2「電気の拡声装置がないから」。

そういう社会で、もし、上手に話す力がなければどうなるか。  
文字という伝達手段が効果的ではないために、話す力がないことは、すなわち、生きていくためのコミュニケーションが不十分になってしまうことを意味する。また、電気の拡声装置がないために、大きな声で話す力がないことは、コミュニケーション

の範囲を縮めてしまうことを意味する。だから、上手に話すということは、生きていくために必ず必要な力であるということになる。「くから。」って書いてしまいたいようになるが、あくまで、設問に従って「く」ということ。

【解答例】「文字という伝達手段や電気の拡声装置が発達していない社会では、話す力がないことは、即、生きていくためのコミュニケーションが不十分になってしまふことを意味し、また、大きな声で話す力がないことは、コミュニケーションの範囲を縮めてしまうことを意味するから、上手に話すということは、生きていくために必ず必要な力であるということ。」

●たしかに、村語や家語や自分語が、◆4お上の定めた標準語で規格化されれば、ことばの通用する範囲はひろまるだろう。だがそれではことばが「通用する」とはどのようなことなのか。そこで通用するのは、通用するように作られ、教えられた意味ではないのか。行政上の通達を「正しく」つまりお上が期待するように理解し、かなりの広範囲の地域の人々が、規格化された意味を伝えあう——標準語を作り、それを教える初等教育を徹底することが、近代のいわゆる国民国家の形成と手をつないで進じたのは偶然ではない。

▽これも、常識にしてほしい。つまり、「国語」は作られたものである、ということ。日本語の場合は、明治時代に、学校教育の発達とともに形成されていった。日本国内なら、どこでもだれにでも通用することばとして、日本語の標準語は設計されたのである。江戸時代は、薩摩と江戸の言葉は異なっていたし、百姓と武士の言葉も異なっていた。ほんとに実用的なレベルでまったく通じないほどに隔たっていたのである。

◆問4 「お上の定めた標準語」とはどのようなものか。

「標準語」というキーワードと「(ダッシュ)」|| いかえの記号によって、期待されている答えが見えてくるはずだ。

「行政上の通達を「正しく」つまりお上が期待するように理解し、かなりの広範囲の地域の人々が、規格化された意味を伝えあう——標準語」という部分に注目。ここをそっくり利用して答案を作ることができる。

【解答例】「人々が行政上の通達をその発信者の期待通りに理解し、広範囲の地域の人々が、規格化された意味を伝えあうことができる言葉。」

⑤ ●だがことばの「意味が伝わる」ということが実際には◆5何層にもなっているという、考えてみればあたりまえの事実が「耳をひらかれた」のも、自分語で何のためらいもなくいきいきと自己表現をし、「意味の理解」ということが何層にもなつた、言語内言語とでもいべき太鼓ことばをもっているこのサバンナの人たちとのつきあいのなかでのことだ。学校で教わる標準語で方言や自分語が画一化されることで消えてしまう意味の伝達の側面が、人間の生きた声による伝えあいのなかには重要なものとしてある。それは文字を用いた学校での標準語教育がすすみ、テレビの普及

とともにNHKのアナウンサーのような話し方がひろまっている日本の社会でも、考えてみれば当然のことだし、おくにことばや自分語による表現の大切さの認識が消えてしまったわけではない。私が「音声言語の音象徴性の問題、|| ことばが声として、聞く人の感覚にじかに働きかけて意味を伝える、擬声語、擬態語の(日本語やアフリカの言語での)重要性、(そこからとくにそれらが貧困なヨーロッパ諸語のことに)興味をもつようになったのも、サバンナの人たちのおかげだ。

▽「ことばの『意味が伝わる』ということが実際には何層にもなっている。」というのは、(標準語)とは反対の事態をいつている。標準語の伝える意味は一つでなければならぬ。例えば「手」の意味および発音は一つに規格化され、画一化されることによつて、国民全体に確実に伝わる言葉となる。声としての、東京の人の「テ」と大阪人の「テ」はほんとは違う。大阪人は「テエ」と伸ばすね。「てえ、きれえにあらいやあ」と「てをきれいにあらいなさい！」のあいだには、伝えようとする意味に微妙な違いがあるのかもしれない。例えば、「てえあるたほうがあんたのためにええでえ」というニュアンスと「手を洗うという決まりになっているのだから洗いなさい！」というニュアンスの違いとか。この二つを音(一種の音楽)として聞いてみると、あきらかにメロディーやリズムが違っている。「デー・キレーニアライヤー」/「テオキレーニアライナー」。どうだろう？

アフリカの「太鼓ことば」というのは、ことばの音にある高低やリズムの特徴をとらとえて、それを太鼓の音に置き換えるというもの。「デー・キレーニアライヤー」はどんな太鼓の音になるだろうか。

音象徴性というのは、いわゆるオノマトペのように音自体が何かを象徴することを指している。例えば「にっこり」というその音が、なんだか、あのほほんださまを象徴するわけだ。アフリカの言語や日本語はヨーロッパ諸語に比べて、オノマトペが発達している(逆に、抽象語が苦手。日本語の中の抽象語はほとんど、漢語かカタカナ語)。『日本語オノマトペ辞典 擬音語・擬態語4500』という本がある。めちやくちや面白い！

○標準語||画一化された言葉。意味は単層。  
○生きた声||自分語や方言、擬声語、擬態語。意味は重層。

◆問5 「何層にもなっている」とはどのようなことか。

「ことばの『意味が伝わる』ということが実際には何層にもなっている。」というふうには、☆傍線部を延長して考える。☆「Aではなく、B」型で書く。ことばには単層だけでなく、重層の意味がある。

前半はこうだ。「言葉には、(標準語のように)画一化された意味が伝わる場合だけでなく、」

問題は後半。声として届く場合、という部分を入れたい。「(自分語や方言、擬声語、擬態語のように)声として聞く人の感覚にじかに働きかけて多様な意味を伝える場合がある、ということ。」

「解答例」「言葉には、標準語のように画一化された意味が伝わる場合だけでなく、自分語や方言、擬声語、擬態語のように、声として聞く人の感覚にじかに働きかけて多様な意味を伝える場合がある、ということ。」

⑥ ●私ははじめ、この人たちの歴史意識を研究して、『無文字社会の歴史』などという本も書いた。だが、この人たちとのつきあいが長く、深くなるにつれ、私は「無」文字社会という欠落を意味する表現は、文字があることを社会の「進歩」によって達成されるべき段階のように考え、それを前提としてあるべきものがないとでもいうようなとらえ方に、やはりまだどこかで汚染されているように思い、**「読2」「文字を必要としなかった社会」というとらえ方**もあると思うようになった。  
▽⑦を讀んでから、読解問題2へ。

⑦ 実際、この人たちの、声を含む音のコミュニケーションや身体表現の世界の豊かさ、私が主につきあったモシ社会にはとほしいが、他の多くのアフリカ社会では発達している木彫など画像表現の豊かさに接していると、この人たちは「文字が欠如している」状態にある（だから早く学校をたくさん作り文字教育を普及した方がいい）と考えるより、「文字を必要としなかった」それなりに自足した豊かな表現と伝えあいの世界に生きていると考えるようになる。

■読解問題2 『文字を必要としなかった社会』というとらえ方」とはどのようなものか、説明しなさい。一二〇字以内。

☆「AではなくB」型。「とらえ方」という語に注目して、対比点を探すと、「文字があることを社会の進歩によって達成されるべき段階のように考え、それを前提としてあるべきものがないとでもいうようなとらえ方」が見つかるだろう。これは、文字があるべきなのがない、よくない状態、という否定的なとらえ方だ。

では、そうではない、文字がないことについての、肯定的なとらえ方はどう表現すればいいか。⑦段落を見よ。「文字を必要としなかったそれなりに自足した豊かな表現と伝えあいの世界に生きている」という表現が見つかる。これを利用しよう。

「解答例1」「文字があることを社会の進歩によって達成されるべき段階のように考え、それを前提として、文字がないことを否定的にとらえるのではなく、彼らも文字を必要としなかったそれなりに自足した豊かな表現と伝えあいの世界に生きている」というふうにとらえること。」

「声を含む音のコミュニケーションや身体表現の世界の豊かさ」「木彫など画像表現の豊かさ」という部分を取り入れてもよい。

「解答例2」「文字がないのは遅れた社会であるという考えを前提として、文字がないことを否定的にとらえるのではなく、彼らも声を含む音のコミュニケーションや身体表現・画像表現などによる豊かな表現と伝えあいの世界に生きていくと肯定的にとらえること。」

- 7/14 -

●だからといって、私は文字と文字教育の意味を頭から否定しているのではなく、それについてはまた別の長い議論が必要になるのでいまは省くが、ただやみくもに識字率を上げることが社会の進歩だと考えるのではなく、文字を用いた言語教育によって**6失われるものの大きさ**について、私たちが忘れたことさえ忘れてしまっていることを思い出し、問題化することの大切さを指摘したいのだ。  
▽文字教育を否定しているのではない、という主旨をきっちりチェック。こういうところは、記述問題では狙われにくいだが、選択肢式のときにひっかけの要素として使われることが多い。「筆者は文字教育を否定している」という内容が含まれている選択肢は、不適切といわざるを得ないだろう。

◆問6「失われるもの」とは何か。

それは文字によって消えていくもの。文字のないことによって逆に息づいているもの。「無文字社会」における（よいもの）を拾い上げていく。チェックポイントは、文字の対になる（声）。

「音声言語の美しさ、輝き」「声による重層的な意味の伝達」「声を含む音のコミュニケーションや身体表現の世界の豊かさ」「木彫など画像表現の豊かさ」。

「解答例」「文字のない社会に生きていく（音声言語の美しさや）声を含む音のコミュニケーションや身体表現、また、木彫りなど画像表現によって伝えられる豊かさ。」（ ）内は、省略可。

⑧ ●のっけから脱線したが、私があたえられた論題は「多言語主義」だ。だがこれまでに述べたことから、「言語」というものを数えられる、有境のものとして考え、その複数のものつまり「多」が共存することをよしとする原理や主張や政策、つまり「主義」である「多言語主義」という問題の立て方自体が、ことばについてのかなり偏向した一つの立場を表している。私がいいたいことは、明らかであろう。太鼓ことばについての長い分析と、私自身もそれをもろろ習った体験とから、太鼓ことばは、ことばの原体とでもいうべきものが、口やのどや肺などの発音器官の訓練された運動を通してではなく、やはり訓練された反射運動の鎖となって手からほとばしり出るものだと私は考えるようになった。

▽話題が、「多元言語主義」に移る。独特の長い構文だが、惑わされないように。傍線を引いて整理しておこう。

・多言語主義Ⅱ「言語」というものを数えられる、有境のものとして考え、その複数のものつまり「多」が共存することをよしとする原理や主張や政策。

・筆者の主張Ⅱ「多言語主義」という問題の立て方自体が、ことばについてのかなり偏向した一つの立場を表している。（否定的）

・太鼓ことばⅡことばの原体が、手からほとばしり出るもの。  
しかし、このままでは、太鼓ことばが何のために引き合いに出されているのかよく

- 8/14 -

わからない。次を読もう。

⑨ ●つまり太鼓ことばを通して、私はいわゆる言語も身体技法——文化によって条件づけられた身体の使い方——の一つとして、それによって社会に参加してゆくのに、他の身体技法とともに幼時から習いおぼえるものだと考えるようになった。アフリカ南部のコイサン言語を話す人たちが、幼時からの発音器官、つまり身体の訓練によって、私たちにはたいそうむずかしいクリック音（吸打音）を、それが必要な場で「自然に」、つまり身体の反射的運動連鎖として意識せずに発音できるなどというのも、その一例だ。

▽太鼓ことば↓言語⇨身体技法。社会参加のために、身体訓練によって獲得するもの。

⑩ ●ことばというものは、◆7反復と即興の拮抗する関係のなかで、個人によって日々実現されているものだ。まさに自分語といたことをいったが純粋に「私」一人のことばが成り立たないことは明らかだ。他の「私」との伝えあいがことばである以上、他の「私」と共通のものが基本になければならない。それは幼いときから、ひとの口まねをして、つまり身体技法として、「私」が他の「私」たちと作っている社会に参加するための「ハビトウス」の一種として身につけるものだ。その限りで、ことばは誰かがすでに発音したものの反復でしかありえない面をもっている。だが、その反復のなかから、その発音の仕方においても、その音が意味するものの組みあわせ方においても、無限に多様な即興を生み、「私」の表現を、ひとりひとりの「私」が生みだしてゆく。

⑪ ●言語というのは、まさにその運動連鎖の反復とそこに思考によって反射運動連鎖をあえて断ち切ることも含めてもちこまれる即興との拮抗のうちに成り立っている。

▽問7に關係するキーワード、反復と即興に印をつける。▼対比。対比關係が出てきたら、整理してメモせよ。

・反復⇨ことばは、誰かがすでに発音したものの反復。

・即興⇨ことばは、そのときどきの、この「私」の生み出す一回きりの表現。

他の「私」たちと共通の言語体系としての「ことば」/この「私」が生み出す一回きりの「ことば」。「ことば」には、この二つの側面がある。ソシニールは、前者を「ラング」、後者を「パロール」と呼んで区別した。特に〈声〉は、その一回性、固有性からいって、パロールである。※「言語と経験」でも、言語体系（ラング）と意味と切り離せない手触りを帯びる発話（パロール）の対立が主題になっていた。

◆問7「反復と即興の拮抗する關係」とはどのようなものか。

「拮抗」⇨力に優劣がなく互いに張り合うこと。ここでは逆向きのベクトルが同時に釣り合っているという感じ。

答えの型を考えてみよう。☆傍線部延長術も用いて、「ことばというものは、…の

關係の中で実現している」という全体をいかえてみる。「だがその反復のなかから、…多様な即興を生みだしてゆく。」という本文の記述を手がかりにして、「ことばは、反復の中の、即興として実現しているという關係。」という型を採用しよう。反復と即興は相矛盾することであることをふまえて、形容していく。

「誰かがすでに使用したことばの反復」

「ひとりひとりの「私」が無限に生み出す、そのとき限りのことばの表現という意味での即興」

「解答例」「ことばは、誰かがすでに使用したことばの反復の中から、ひとりひとりの「私」がそのとき一回限りの表現を無限に生み出す即興として実現しているという關係。」

※時枝誠記という国語学者は、言語を、ひとりひとりの「私」（言語主体）の表現および理解の過程そのものとして考えようとした。これを言語過程説という。時枝はソシニールを批判していたが、ソシニールの趣意は、言語の研究に個々の〈人間〉が入り込まないように慎重に切り分け、その研究対象をラングに限定することにあった。一方、時枝は、人間⇨言語主体なくして言語はあり得ない、と考えた。時枝誠記『国語学原論』、名著なり。

●その個々の無数の声たち——発せられた瞬間に消えてゆく、人類が立ち上がった二本足の直立歩行をはじめ、声帯の位置が下がり、声の分節化が可能になって、はじめことばを発してからのおそらく百万年ほどのあいだに、発せられては何の痕跡ものこさず消えていった、宇宙の星の数よりももしかすると多いかもしれない、数え切れないことばたちのことを、私は思う。それはたえざる反復と即興のくりかえしだったのである。そのなかから、文化の力で、生物の単一の種としては例外といえるほど地球上の多様な環境に適応して生き、そのことによってまた文化もその一部であることばも多様化させてきた、現在地上に生きているHomo sapiensである私たち。

▽二足歩行と発聲の關係については知っていたらどうか。「アイウエオ」といった音の區別が発聲できるようになったことが言語発生の基礎条件としてある。また、直立による大脳容量の発達も關係している。これらは両方そろわないと言語にはならない。いくら大脳だけ発達しても、発音器官が未発達なままでは音声を区別できないのである。そういう意味では、言語⇨音声はそもそも、示差的なもの（区別するもの）として発生したと言える。

私たちは、反復によって、他者と通じることばを習得し使用する。「もかん」と発音していても通ぜず、他者の真似をして「みかん」と発音できてやっど他者と通じあえる。しかし、同時に、ぼくの「みかん」とあなたの「みかん」、ぼくの今日の「みかん」ときのうの「みかん」は発音が少しずつ違う。この同一性と差異の間に言語行為は存在している。

単なるコピー、正確な反復ではないところに変化と多様性が生まれる。DNAが単純正確にコピーされるのではないところに、進化が生じるのと似ている。生命が変化する環境に適応すると同じように、言語（文化）も進化し環境に適応し、多様化していく。

⑫ ●その多様化されたことばたちの反復と即興のくりかえしの群れのなかから、言語学者と呼ばれる観察者が、ある規則性をききわけて、その規則がつくる体系を「ラング」として想定したとしても、その体系が◆8有境の閉じた体系を、空間の広がりにおいても、時間の流れのなかでも、なしていないことは明らかだ。もしそれが、少なくともある期間のあいだ、有境の閉鎖系として固定されたとすれば、それはことばの「制度化された側面」とみなすべきものだ。

▽ここにあるように、ラングとは、言語の規則性がつくる体系のことである。日本語という体系、英語という体系。

ここでは、ラングを否定的にいつているが、規則性がつくる体系を想定することには、もちろん意味がある。無意識に使っている言語を自覚的に見つめ直すことは、現実の言語使用の効率を上げかつ豊かなものにするだろう。外国語を学ぶときに、規則性が整理されていなければ、私たちは途方に暮れるだろう。

しかし、筆者がいうように、〈ザ・日本語〉〈ザ・英語〉といったものが、空間的にここからここまで使われていると限定できたり、〈ザ・平安古語〉といったものが時代的に何年から何年まで使われた、などと固定することはできない。

もし、〈ザ・日本語〉という「境目のはっきりした、閉じた言語体系」なるものがあるとしたら、それは無理に、自然な言語の中から制度（社会的に決められたもの↓『現キ』参照）として（人為的に）決めたものということになる。国語審議会などというはそのようにして決められた言語体系である。

※小学校の教科書やNHKのアナウンサーは標準語を使うわけだが、現実には、そんなことばで完全に生活している人はいない、ということになる。

筆者の立場は、実際には、他ときれいに区別される完結した〈ザ・何々語〉などというものは、ない、というものだ。

◆問8 「有境の閉じた体系」とは何か。

☆切り身の方法。有境の／閉じた／体系。それぞれを補足していく。

「有境」とは、「境界がある」ということ。つまり、それとそれ以外のものがはっきり区別されていると言うことである。

「閉じた」とは、その中で完結した体系を作っているということ。

「体系」とは、ここでは、〈日本語〉といった一つの言語体系。

「解答例」「他とはっきり区別することができ、その中で完結した体系を持っている一つの言語体系。」

⑬ ●そのことは、いろいろなことば——そのちがいに境があるわけではない——を同じ人が当然のことのように日常話しているアフリカで暮らしていれば自明のことだが、たとえばヨーロッパでも、ドイツ語とオランダ語などにしても、方言の地域差

のなかで実際は連続していて、ただ国家を単位とする制度としての、ドイツ語とオランダ語があるにすぎない。

▽「そのこと」他ときれいに区別される完結した〈ザ・何々語〉などというものは、ない、ということ。

アフリカの場合はひとりがいろんなことばを話している。このとき、それぞれのことは混ざり合っている。

ドイツ語とオランダ語の例では、その中間にいろんなオランダ風ドイツ語だのドイツ風オランダ語だの、いろんな方言が存在するということをいつている。たまたま、ドイツとオランダという国民国家の境目があるときそこに引かれたので、それぞれの国家は〈ザ・ドイツ語〉と〈ザ・オランダ語〉の間に線引きをしたに過ぎない。

もし、日本でも、京都と大阪がそれぞれ独立国家を作ったとしたら、大山崎あたりに国境ができ、ここからは大阪語、ここからは京都語というふうに分けられるであろう。大阪国教育委員会は、〈ザ・大阪語〉を京都語や奈良語とは区別するように体系化するだろう。大阪国国民が学ぶ教科書は、正しい大阪語で書かれるはずである。もちろん、すべての科目が大阪語で説明される。大阪大学は大阪語を研究する国語学科を作り、外国語学部には〈京都語学科〉ができる。大阪と京都が戦争になったら、国境にある大山崎は独仏におけるアルザス・ロレーヌ地方のように引き裂かれる運命に遭うのである。大山崎町民は、大阪軍が迫り来る中、自分たちのしゃべっているのは大阪語なのか、京都語なのか、悲劇的な自問を繰り返すのであった(笑)

終わりに、筆者のいつていた多言語主義へのスタンスをもう一度確認しておこう。

・多言語主義Ⅱ「言語」というものを数えられる、有境のものとして考え、その複数のものつまり「多」が共存することをよしとする原理や主張や政策。

・筆者の主張Ⅱ「多言語主義」という問題の立て方自体が、ことばについてのかかなり偏向した一つの立場を表している。(否定的)

■読解問題3 「多言語主義」への筆者の批判はどのような点にあるか、一五〇字以内、まとめなさい。

このように、材料はそろっているが、どう組み立てたらよいか、という場合、まず☆答えの型を考えよ。比較的長くなるのが予想される場合、この〈型〉を念頭に置いてやらないと、日本語に破綻を来す恐れがある。また、☆端的に答える、☆お尻から書く、といった手と組み合わせてみよう。

〈端的〉にやってみると「批判はどのような点にある？」↓「多言語主義という考え方は偏向している点」。これを〈文のお尻に〉する。付け足すのは、「なんで偏向しているのか」「どのように偏向しているのか」。くっつけて、型を作ってみよう。

「型」「多言語主義というのは、…という考え方であるが、言語とはじつは、…なので、多言語主義という問題の立て方自体が、…というかたよった考え方であるという点。」

「解答例1」「多言語主義というのは、いろんな種類の言語が共存することをよいことだとみなす考え方であるが、言語とはじつは、境目がなく連続しているので、各言

語体系は他とはっきり区別することができ、その中で完結した体系を持っているという多言語主義の問題の立て方自体が、かたよった考え方であるという点。」

ここまで長くなると、一つの名詞句にするのは、なかなかたいへんだし、日本語としても違和感が残る。特に「くので」といった因果関係でつなぐ部分と、文末が離れば離れるほど、おかしい感じになる。「ので」がどこへかかかっていくのか、わかりにくくなるからである。へたをすると、あれこれやってるうちに、きわめて読みにくく不正確なものになり、せつかくわかってたのに、×というおそれもある。

それを防ぐ一つの方法が、☆2文以上に分けるという方法だ。七、八〇字を超えたら、使ってみてもいい。ただし、分割には分割の難しさもある。まず、文末は、解答例1のように必ずしも、「く点。」にしなくてもいい。「くから。」などにもこだわらなくていい。ただし、設問の問いかけに対する応答になっているように、文章全体で調節しなくてはならない。文を分けた解答例を示しておくので、研究されたい。

【解答例2】「多言語主義は、いろんな種類の言語が共存することをよいことだとみなす考え方であるが、その問題の立て方は、「言語体系は、他と区別でき、その中で完結した体系を持つ」という前提に基づいている。しかし、筆者は、各言語体系は、境目なく連続していると考え、多言語主義の前提を、偏向したものとして批判している。」

#### ■展望(理論編)

〈追跡〉は、論理の流れをていねいにたどっていく作業であるが、それだけでは読んだことにはならない。いくつかの部分問題には答えられるかもしれないが、今回の読解問題3のような主旨問題を考えるためには、〈停止〉↓〈展望〉が必要だ。いいかえれば、ふりかえりとまとめ。山頂で、登ってきた道を見渡すことに似ている。

一つの文章を三読(1アウトラインの把握、2ていねいな追跡、3ふりかえりとまとめ)するという方法もあるが、限られた時間で設問に答えなければならぬ読みの場面では実際的ではない。提唱したいのは、追跡と展望の同時進行、具体的には、〈意味段落の終わりでの停止〉↓〈展望〉という方法だ。論理をたどりながら印をつけていく。やがて、論理の切れ目⇨意味段落の終わりに到着する。この文章なら、一つめは⑦段落の終わりだ。そこで、小休止し、印を頼りにそこまでする。〈展望〉する。

「文字がないのは遅れたことじゃない。文字のない社会には、声や身体表現の豊かさがあるんだよ。」  
 こういった〈展望〉をさせること自体がじつは設問になる。設問とは読んでいるかどうかを確認するためのものだから、当然ですね。読解問題2や脚注問題6がそれに当たる。

さて、「多言語主義」について、ふりかえりと補足をおこう。  
 多言語主義に似たことばに多文化主義(『現キー』参照)がある。発想の根っこは同じと考えていい。「異なった〈文化／言語〉の共存を積極的に認めようとする立場」。この立場が対抗しているのが、単一〈文化／言語〉主義。「一つの国家⇨一つの国民⇨一つの文化⇨一つの言語」を理想とする考え方だ。「ナショナルリズム」「国民国家」(『現キー』参照)という用語を思いだそう。このような「日本⇨日本人⇨日本文化⇨日本語」的な社会観は、人・もの・カネ・情報が全地球的に流動する時代の実態に合っていない。また、単一のみをよしとする考えにこだわることは、いろいろな

摩擦と不幸を生みだす。そういう認識から提唱されたのが、多文化／多言語主義である。

しかし、筆者はその多言語主義に対して批判的であった。なぜか。多言語主義の言語観には、まだ、国民国家的な考えが残っているからである。ある社会の中に、日本語も中国語もハンガールも英語もあっていい、という考え方には、それぞれの言語の背景に日本人、中国人、韓国人、なんやら人という集団が想定されている。多言語社会は、多色のパッチワークのようなものだ。筆者は、そのようなきれいな色分けをあたりまえだとする考え方に疑問を呈しているのである。

それに対して、ヨーロッパなどで「複言語主義」というものが提唱されている。これは、個人レベルで、第一言語は日本語、第二言語は中国語といったように複数の言語を話すようにするという考えである。個人を単位とした言語観をとる点で、筆者の考えと重なる部分がある。次は参考資料。

「複言語主義」は個人レベルでの複数言語の並存状態をいい、その個人レベル(⇨ミクロ的)の言語的多様性を尊重・促進していく姿勢である。その際、言語を媒体としてではなく、それを使用する人間の視点から捉える。Cole(2001)によると、「複言語能力とはコミュニケーションの目的のために複数の言語を使い、異文化間の交流に参加する能力である。そこで人間は社会的主体として、いくつかの言語において、様々な程度の能力と、いくつかの文化的経験を持っている。これは個別的な能力を重ねたり繋げたりしたものではなく、複雑に混成した能力」である。そして、それが目指すのは「ヨーロッパとしての統一性を形成しつつ、民主的シテイズンシップを開発することとする。複言語主義は言語を個人のレベルから捕らえなおし、「混成的な」言語状態である「複言語」という形態を仮定する。実体的な言語観を退けることにより、言語を国家語／民族語／外国語等とランク付ける権力から分離する。さらに人間を「社会的主体」とみなすことにより、人間存在のあり方に他者とのインタラクションの結果獲得される相互性を導入し、共同体にも「民主的シテイズンシップ」という可塑性のある理念を立てる。国家を単位とした言語観・人間観から、個人を単位とした言語観・人間観へ転換することにより、「国家⇨国民⇨言語」という構造が持つ利害構造を解体し、個人⇨社会に創造性を回復させる。この意味で「複言語主義」は、国民国家主義のイデオロギーに対する対抗理念とも解釈できる。(福島青史「日本の多言語状況と「複言語主義」」『早稲田日本語教育学』二〇〇八年五月)

#### ■論述への挑戦

問。筆者は、日本などの音声表現について否定的に論じていた。アフリカの例と比べて、日本の音声表現の実情についてどのように考えるか、自分の経験などもふまえて論じなさい。八百字以内。